

「悲運の印尼華人(1)」(2016年12月12日)

ヨグヤカルタ市内にあるドゥタワチャナキリスト教大学構内にある新入生募集の大型立て看板に、三人の女子学生が顔を寄せて本を見ている写真が掲載されている。その三人の中央にいる女子学生がジルバブを被って頭や耳を覆っており、インドネシアの常識から言えば、かの女はムスリマであるのが明白だ。他にも、街中に置かれた宣伝立て看板に男女学生数人を取り混ぜた写真が使われ、その中にもジルバブ女子学生が写っている。

開けた精神でそれを見るなら、イスラム教徒であってもキリスト教に関りを持って悪いことは何もないし、大学側もイスラム教徒の入学に関して拒否も差別もしないことを言明しているように思われるのだが、閉塞的精神で常に対立・敵対を生存原理としている人間の目から見ると、イスラム教徒をキリスト教化しようとしている陰謀だ、という疑惑というか、ネガティブな印象が出現するようだ。

そういう精神構造の閉塞的なひとびとが、その立て看板を撤去するよう大学側にクレームをつけた。ジルバブはイスラム教のシンボルであり、キリスト教大学の新生募集宣伝に使われるのはふさわしくない、という理由でイスラムウンマフォーラム(FUI)が大学側に苦情を申し入れ、撤去するという合意に達したとのこと。

インドネシア政府が国民に異宗教間の宥和と共存を奨め、この種の不寛容を戒める方針を進めて来たにも拘わらず、バスキ・チャハヤ・プルナマ都知事の宗教冒涇問題を断罪するためのムスリム大規模デモが暴動含みで2016年11月4日に行われ、それ以来、ムスリムの異宗教者に対する姿勢が一転して排他的な様相を呈するようになった。

政府倒壊を画策する政治勢力が人間の大海原を利用して野望を遂げようとしている事態に対処するため、毎週金曜日にイスラム教徒の敵である都知事を有罪にして留置場に投げ込むことを要求するデモの連発を計画するイスラム界を国家警察は抑え込んでいたが、突然方針を撤回して12月2日のデモを解禁した。

そういう世の中の流れに伴って、閉塞型精神のひとびとが動きを活発化させはじめた社会状況が生み出したもののひとつが上述のヨグヤカルタの事件だ。似たようなことは全国各地で散発的に起こっており、これまで憲法のために国の主になれなかった勢力があたかもその地位を手に入れたかのような振舞いを見せているのも、世の動きがかれらに追い風を与えているためにちがいない。

言うまでもなく、上述のヨグヤの事件に対しては、開けた精神勢力から強い批判が投げかけられており、イスラムヌサンタラの国家方針に背くものとして不寛容精神を世の中に示す人間を警察は

取り締まれという声が市民の間から出されているが、そんなことをすればイスラム界からの反発を煽るだけであるため、社会の治安と秩序の維持を最大使命としている警察がそのようなことを行った事例はいまだかつてない。

上のような流れによってイスラム界がインドネシア共和国の主人たらんと蠢動しているのが昨今の状況なのであり、インドネシアで突然イスラム化が盛んになってきたというものの見方は正鵠を射ていないとわたしは考える。イスラム化が盛んになっているのではなく、イスラム勢力がワンノブゼムから単独絶対優位の座に向かう勢力強化の動きがこれであるにちがいない。[続く]

「悲運の印尼華人(2)」(2016年12月13日)

インドネシアはイスラム教徒が圧倒的多数だから、イスラム勢力が国家の主人の地位を得ているはずだと思うのは、実情を知らないための誤解だ。独立国家設立の場でイスラム教徒である建国の父たちが作ったインドネシアの憲法が何を定めているのかがもっと知らされるべきだろう。圧倒的多数のイスラム教徒は国の主人の座に置かれておらず、宗教を異にするマイノリティグループと共存するためにワンノブゼムの位置に置かれており、必然的に国家形態は世俗国家となって有神性だけが宗教というもののよりどころとされている。イスラム教徒が持つべき人間(ムスリム)の在り方という人間観の基本コンセプトが「地縁に根差したイスラム者」つまりイスラムヌサンタラになっているのも、その点における整合性がもたらすものだ。

11月4日のデモ以来、ジョコ・ウイド大統領は政府転覆計画がその流れの裏側にへばりついていることを指摘して来た。ISISに関わる国内テロリストグループがインドネシア共和国という国家体制を転覆させようと計画しているのとは別に、国内の政治勢力の中に現政権を暴力的非合法的に覆そうとしているものがあることを国家諜報部門は既に察知している、と大統領は叛乱者に宣戦布告した。11月5日未明に行われた異例の大統領表明がそれだ。

そして解禁された12月2日のデモ当日、未明の時間帯に政府転覆計画首謀者として10人の著名人を国家警察が取調べのために連行した。この事件の詳細は、「政府転覆計画が明るみに」(2016年12月5日)をご参照ください。

その対応作戦への自信があったればこそ、国家警察はデモを解禁したにちがいない。最終的に国家警察は政府転覆計画に関連して11人を容疑者とし、そのうち8人は政府転覆容疑、2人がヘイトスピーチ容疑、1人が国政統治者侮辱の容疑で立件を進めている。

更に計画の資金源に関する人間関係図がソーシャルメディアに流れており、警察はその真偽の取調べにも着手した。その図にはトミー・スハルトが中央に鎮座ましましているのである。

そもそも、世の中にこのようなイスラム勢力強化の動きを巻き起こすきっかけを作ったのはいったい何だったのか？2017年に行われる首都ジャカルタ特別区首長選挙、いわゆる都知事選がそれであったのは言うまでもあるまい。

2012年10月15日にPDI-P党が推すジョコ・ウイドドとグリンドラ党がバックアップするバスキ・チャハヤ・プルナマが対立候補を下して正副都知事に就任したあと、ジョコ・ウイドドはまだ任期の残っている2014年10月16日に都知事の座を降りてインドネシア共和国7人目の大統領に就任した。ジョコウイ都知事が大統領選のキャンペーンに入って以来都知事代行を務めていたアホツ副知事は、2014年11月16日をもって正式に都知事に任命された。

それ以来、反汚職と合理的な都民生活の実現というジョコウイ都知事の方針を継続し、鉄腕と舌鋒をふるって明快な法治主義を推進して来た新都知事への都民の支持は高まり、最近の世論調査によればアホツの行政に対する都民の満足度は62%という数字が報告されている。[続く]

「悲運の印尼華人(3)」(2016年12月14日)

ところが次期都知事選に立候補して続投することをアホツが表明したあと、諸政党が対抗馬を立て候補させた。ジャカルタ総選挙コミッションに登録された立候補者はアホツの他、前教育文化大臣を務めたアニエス・バスウェダンとSBY前大統領の子息アグス・ハリムルティ・ユドヨノの三組。

各政党が全国的に知名度の高い強力な対抗馬を当て込んで来たのは、ジョコウイが都知事から大統領に昇ったルートが既成事実となったため、それに倣おうとするインドネシア文化特有の先例主義の表れだと評する意見が国内政治オブザーバーから出されている。SBYが子息をそこに推し出してきたことを見ても、その意見にはうなずけるものがある。いまだかつてなかった、都知事選が大統領選の前哨戦となる歴史的な転換がインドネシアに起こったと言えるだろう。

だがアホツ都知事は現職の強みに守られ、過半数都民に支持されて高い評価を受けており、2016年3月の次期都知事選予測では、当選可能性59.3%となっていた。ところが9月の予測は34.2%、10月の予測は31.1%、更には11月調査で26.6%へと支持率はダウンして行ったのである。

一方、その11月調査では、アグスがトップの29.6%、アニエスは26.4%を獲得し、三つ巴の様相へと変化している。いや、数字を見るなら三つ巴という印象を受けるかもしれないが、アホッの評価を時系列的に見るなら、その転落はもはや脱落を意味しているように見えてくるのである。

圧倒的に強い現職候補を打ち負かすために何をすればよいのか、という戦略を他の二組の対立候補陣営が考えないはずがない。政策論争などをして、インテリ層の薄い有権者たちを引っ張る決定的手段にはならないだろう。インドネシアの草の根民衆を引っ張るには、かれらが得をするように感じさせる公約で歓心を買ひ、同時にかれらが依然としてどっぷりと浸かっているプライモーディアリズム感情を刺激するのがもっとも安直で効果的な手段であることを、対立候補陣営は知り抜いている。

人口の85%がムスリムで構成されているジャカルタ住民の心をアホッから離反させるためには、非プリブミ系であり、非イスラムであるというかれの人間像から攻め込むのが有効な手段になる。そこに使われるツールとしてアルクルアン第5章 アルマイダの章の第51節に記された文章が、アルクルアンを神聖視するまじめなムスリムを動かす決め手になる。

アルマイダの章第51節には次のような言葉が記されている。

やあ、篤信な者たちよ。汝らはユダヤ人やキリスト者を(汝らの)統治者にしてはならない。かれらの一部はかれらのための統治者なのである。汝らの間でかれらを統治者とする者はだれであれ、本質はかれらと同じ者になるのだから。実際にアッラーは暴虐な者に指針を与えてはいないのだ。こうしてわれらは心に病を持つ者(偽善者)がすぐにユダヤ人やキリスト者に「われらは災厄に見舞われるのが怖い」と言いながらすり寄って行くのを目にすることになる。願わくば、アッラーは預言者に勝利を与え、あるいは神の傍からの決定がもたらされんことを。こうしてかれらは己の内部に隠していたものを悔やむことになる。そして篤信な者たちは言うだろう。「これがアッラーの名において、本当に神と共にあらんと誓いを心底から述べた者たちなのか？」かれらの善行は砕け散り、かれらは報われない人間となるだろう。

イスラム者が非ムスリムに統治されることをあつてならないものとして拒絶する根拠に、この文章は使われてきた。実は、アホッが副知事から都知事に昇格したとき、イスラム強硬派がそれを拒否するデモを数回繰り返したことがあり、そのときの謳い文句にされたのも、このアルマイダの章第51節だった。[続く]

「悲運の印尼華人(4)」(2016年12月15日)

当時はインドネシア共和国国民を分裂離反させ、相互に争わせてこの共和国を乗っ取ろうとするISIS思想に対抗するため、国をあげての国民融和と協調が国家の大方針とされていた時期であり、ナフダトゥルウラマやムハマディヤが一致協力してイスラム界にイスラムヌサンタラを浸透させる動きを強めていたことから、新ジャカルタ都知事に対する異宗教者への不寛容と拒否の動きは完璧に封じ込められた。

ところが都知事選という催しが訪れたとたん、当時とはまったく違う風が吹き始めたのである。都知事選という小さい箱の中で勝利を得ようとする者たちが、イスラムヌサンタラを足蹴にしはじめたということだ。国政を左右する大型政党がそこにに関わり、政界上層の貴顕の一部が自己の利害のためにプライモディアリズムを操ろうとして閉塞型精神の側に立ったのである。まるで掌を返したような風の違いは想像にあまりあるだろう。

都知事選キャンペーンがはじまったとたん、対立候補陣営はムスリム有権者に対して、アルクルアンの神聖さとアルマイダの章第51節を思い出させる動きを開始した。自分の都知事就任時にその同じ武器を用いた攻撃から保護してくれた世相が、一変して自分を見捨て始めた状況にアホッは面食らったにちがいない。そしてきっと、そのフラストレーションと持前の合理精神から、きわめてセンシティブな発言がかれの口からほとぼした。9月27日、かれが選挙キャンペーンにスリブ群島を訪れて行ったスピーチの中でのことだ。

そのときかれはこう語った。「わたしは皆さんを元気づけるために、この話をしたい。みなさんが気掛かりを残さないように。『もしアホッが再選されなければ、アホッの(都民向け福祉)プログラムは空中分解する。』そんなことはありません。わたしは2017年10月まで仕事するのです。だから、他人の言うことなど信用しないように。だって、みなさんは内心で、わたしに投票できないと思ってるんでしょう？アルマイダ51を使ったり、いろいろな嘘をつかれて。それはみなさんの権利です。みなさんがわたしに投票できない。なぜなら『地獄に落ちるのはいやだから』。そんな風に騙されている。いや、大丈夫ですよ。それはみなさんの心の呼び声なんだから。わたしのプログラムは継続されますよ。」

アホッに打撃を与えようとしている勢力が、そのアルマイダ51という言葉に飛びついた。中でも、元新聞記者で今は私立大学の講師や世論調査の仕事をしているブニ・ヤニが、アホッのそのスピーチのビデオを世の中にばら撒いて世論を高めようと考え、スピーチビデオを編集して異なる印象をそこに付け加え、更にセンセーショナルなタイトルをつけてソーシャルメディアに流した。ブニ・ヤニはアホッがイスラムを貶し冒涇したように印象付けるため、アホッのスピーチにある「アルマイダ51を使ったり、いろいろな嘘をつかれて。」の部分から「使う」という単語を抹消し、「アルマイダ51でいろいろな嘘をつかれて。」と解釈できる文章に変えた。センセーションを求める新聞記者の文章作りの常套手段がきつとそのようなものであるにちがいない。

その情報に合わせて、ソーシャルメディアはたちまち轟轟たるアホッ非難のコメントであふれた。悪意ある世論操作が実に小気味よく成功した一例だろう。ソーシャルメディア参加者のほとんどが、確認も裏付けも無視された虚偽情報を鵜呑みにして感情的に反応して来るという実態を掴み切った謀略だと言える。[続く]

「悲運の印尼華人(5)」(2016年12月16日)

もちろんアホッ陣営にも大勢のアホッの友人たちがいる。ブニ・ヤニの捏造ビデオは瞬くうちに見破られて、反対にブニ・ヤニが告発されることになっていくわけだが、既に操作されてしまった世論を覆すのは並大抵のことでは不可能だ。

ブニ・ヤニは言うなればインテリムスリムのひとりである。かれは自分の行為を、アホッの宗教冒流行為を世に問うためにしたことだと釈明したが、悪意のあるビデオ編集については一言も触れず、更には自分に向けられたアホッ側の告発は個人の名誉を貶すものであり、自分の芳名を守るためにこの事件を予審にかけたいと悪びれもせずにその意向を表明している。警察はブニ・ヤニのソーシャルメディアに載せた情報が、世の中の諸勢力に対立・敵対を煽るためのヘイトスピーチに該当するとしてその容疑で送検することになっているが、ブニ・ヤニ自身はそれをヘイトスピーチとはまったく考えていない。

ここぞとばかり、アホッを犯罪者にしようとして警察に訴える者が何人も出た。宗教を冒流したというのが告訴の内容であり、イスラム宗教界の最高位にあるインドネシアウラマ評議会までもがアホッを警察に訴えたのである。インドネシアの法規では、前科があれば公職に就けないと定められているから、アホッが有罪になれば、都知事続投は不可能になる。都知事選対立候補の思うつぼだ。

アホッ自身はスリブ群島でのスピーチについて、「わたしはアルクルアンにせよ、バイブルにせよ、いかなる聖なる書物であっても、その中に記された聖なる章句が政治に利用されることを厭わしいことだと考えている。わたしのスピーチを編集される前の完璧な形で聴いていただければ、わたしがアルクルアンを貶したり、冒流したりしていないことはご理解いただけると思う。わたしには、アルクルアンを冒流する気持ちなどまったくない。」と釈明した。

あるレベルのインテリジェンスや合理精神を持つ人間にはうなずける釈明であるとしても、ムスリムの間でアホッを敵視する大勢の者たちがイスラムの敵であるアホッを断罪せよと叫んでいれば、羊のように雰囲気と外的動因で風のようになびく大多数の草の根民衆の顔を向ける方向はもう決まったようなものだろう。

ブニ・ヤニのビデオ編集行為がアホッの宗教冒涇をでっち上げて社会操作を行ったからアホッが危険な立場に立たされることになったという見方は、的を射ていないようにわたしには思える。つまりブニ・ヤニが有罪になればアホッは無罪となるはずという関係にはなっていないのだ。

ある人間に他人がもたらす毀誉褒貶の感情は、百パーセントその人間の主観に帰する。内容のまったく同一の批判的言葉を同じ調子で親友に言う場合と赤の他人に言う場合とでは言われた側の内面に生じる感情は大違いになるだろう。主観とはそのことを指している。この原理は、ある国が日本人に対して自国の呼称についての干渉を行っていることに通じるものだとわたしには思える。世界中に同じことをしないのは、それが主観に満ちているためだ。

親友に対して普通の人間は心を開いているが、赤の他人には心を狭めあるいは閉ざしている。それが相手の言う言葉をポジティブに受け取らせたり、ネガティブな色に染め上げているのである。精神の開けようの度合いで、赤の他人に対する人間のポジティブさやネガティブさの広さ深さは異なって来るのが普通であり、そこに大まかな傾向を見出すことはできても、個別のケースに対する絶対的な尺度を持ち込むのは不可能だろう。[続く]

「悲運の印尼華人(6)」(2016年12月19日)

人間が感じる侮辱や冒涇といったものは、その本人にとっての主観で満たされており、それを百パーセント客観的に裁断することなど不可能としか思えないのである。人間のエゴ＝主観が旺盛な社会で「他の社会構成員に嫌な思いをさせるな」という社交儀礼的な基準が用いられるようになれば、苦い真理を語る者はいなくなる。ソフトで暖かく優しい社会は、一方で欺瞞と社交辞令と陰口に満ちあふれ、進歩啓発を捨て去って人間を腐朽させる社会へと向かうことになるだろう。

それはともあれ、ブニ・ヤニのようなことをせずとも、「アルクルアンの章句を悪事に使っていると論評したアホッはイスラム教を冒涇している」という断罪を国内各地のソーシャルメディア参加者に書かせるだけで、アホッをムスリムの敵に仕立て上げることはできるはずだ。だから、この宗教冒涇事件はアホッとブニ・ヤニの対決という構図にならないのである。

こうしてアホッの宗教冒涇弾劾デモが行われたあとの世論調査によれば、都民の79.8%がイスラム教冒涇スピーチのためアホッは有罪であると見ており、更に都民の58.4%がアホッを即座に留置場に入れよ、と要求している。

首長の行政が6割を超える満足度をもたらしていたにもかかわらず、突然雲のかなたからその首長は85%住民が信仰している宗教の敵だという声がかかったとたん、その人間を首長の座から追い落とそうとするようになったひとびとの合理精神がいかなるレベルのものであるのかということが、そこで一目瞭然となるにちがいない。要するに、何により重い価値を置いているかということが違っているのだ。

そして16年12月13日がやってきた。バスキ・チャハヤ・プルナマ都知事宗教冒瀆事件の第一回公判を北ジャカルタ地裁が開催する日だ。今や国民的大事件となったこの宗教冒瀆事件に対するムスリム層の関心は頂点に達しており、法廷が開かれた中央ジャカルタ市ガジャマダ通りの旧中央ジャカルタ地方裁判所では表の通りまでもが人間の海と化し、表通りでは街宣車を使ったアジ演説が人間の海の上を流れて行った。

検察公訴人が行った論告では、MUI(インドネシアウラマ評議会)が10月11日付けで公表した姿勢表明に沿っての被告の罪状説明がなされた。MUIの表明では、今回の都知事選において、アルマイダの章第51節が民衆を騙して愚弄する道具にされているというアホッの姿勢はアルクルアンを汚すものと考えられ、アルマイダの章第51節が虚偽を含んでいるという表明はハラムであり、アルクルアンを冒瀆するものであると謳われている。

たとえファトワとして出されなくとも、MUIが表明したことがらはインドネシアの全ムスリムが遵守しなければならないものになることから、イスラムの法という位置付けの中でムスリムが自分をどういう位置に置かなければならないのかは既に明らかだろう。そこに感情的な侮辱という要素が加わってくれば、同胞ムスリムの敵という立場にアホッが押しやられて行く結末は論を待たないように思われる。[続く]

「悲運の印尼華人(7)」(2016年12月20日)

アホッがスリブ群島でのスピーチで「アルマイダの章第51節の内容を伝える際にイスラム教徒が嘘をついて愚弄している」と表明したことは;

1. 刑法典第156条(a)の「故意に公共の場で次のことを行き、あるいは感情を表明した者は誰であれ、最長5年の入獄刑に処す。(a)本質的に、インドネシアで信仰されている宗教に敵対し、悪用し、穢すような行為。」

2. もしくは、刑法典第156条の条項に記された「インドネシア国民のひとつの、あるいは複数の階層に対して敵対・憎悪・侮辱の感情を公共の場で表明した者は最長4年の入獄刑もしくは最大4千5百ルピアの罰金刑に処す。」

という刑法犯罪行為に該当するものであるというのが検察公訴人の論旨だった。

一方、宗教冒瀆の告訴を浴びて被告とされたアホッはそれに対する反対陳述を行い、イスラム教を冒瀆する意図は皆無であり、自分の行為はその罪状にあてはまるものでなく、その告訴は承服できないと主張した。

アホッの主張は次のような内容だった。

スリブ群島での選挙キャンペーンスピーチでは、アルマイダの章第51節についての解釈など何ひとつ行っておらず、またイスラム教を貶し、ウラマ層を侮辱する意図も皆無だった。あの場で述べたことは、不良政治家が都知事選で不健全競争を行い、アルマイダの章第51節を悪用しているということを指摘する意図に発しており、この宗教冒瀆事件はジャカルタ都知事選に関連するものであることを自分は確信している。アルマイダの章第51節は不良政治家が故意にまき散らしているもので、政策論争や個人の誠実さなどで選挙戦を争うことができないため、聖なる章句を盾に使い、選挙民に同じ信仰を持つ者を選ぶよう働きかけるためのものだ。

アホッはさらにまた自分の人間像に触れて、自分のこれまでの半生には、自分を猶子としたイスラム者の義理の父母や自分の義兄弟になるその子供たち、あるいは自分が師と仰ぐウラマたちが大勢関わっており、それが今日の自分を作り上げているのであると説明し、自分にとっては、イスラム教を冒瀆し、ウラマを侮辱するようなことは自分の親や師を侮辱することと変わりがなく、そのようなことを行うのは絶対にありえない、と涙をたたえて主張するシーンも盛り込まれた。

アホッの弁護団はこの宗教冒瀆事件が異例のスピードで容疑者指名～送検～公判という進み方をしていることを指摘し、特定勢力からのきわめて強い圧力が法曹界にかかっていることを思わせるものだとコメントした。「これは基本的人権の侵害を推測させるものだ。」

これは明らかに憲法と民主主義に対する違犯に該当する。」

国内を沸騰させているこの宗教冒瀆事件の構図を俯瞰して見るなら、きわめて深い奥行きを持っていることが見えてくるにちがいない。これは決してジャカルタ都知事という単なる一華人系インドネシア人に向けられた人種的嫌悪感やいじめという平面的な次元のものでなく、自己の野望を遂げるためにこの社会現象を利用しようとするいくつかの勢力が階層構造をなしてうごめいている姿が浮かび上がってくるようにわたしには思えるのである。

「悲運の印尼華人(8)」(2016年12月21日)

(1)アホッも確信しているように、この事件は2017年ジャカルタ都知事選挙が生み出したものだ。アホッの対抗馬として諸政党が出してきた候補者の顔ぶれと、更には各政党の中央本部が強い意欲を見せて一地方首長選に乗り出してきている事実から、アホッが不良政治家と呼んだひとびとの階層が限定されてくるにちがいない。この次元では、アホッが何らかの罪科を得て都知事選からシャットアウトされることが最大の目的となっているだろう。イスラム界を動かし、また法曹界をも動かす力を持つ政界の貴頭がこの次元における動因の源であるのは容易に推測できることだ。

(2)次いで、国民マジョリティとして相応の待遇は得ているものの、信仰という面からはワンノブゼムにしか扱われていないイスラム宗教界が、国家独立以来連綿と抱え続けてきた不満を発散させる機会の到来として、この事件を捉えていることがあげられる。数万人という人間を集めて都内中心部でデモを行うことは、原理主義思想を国家機構の中により強めるための勢力誇示を行う絶好の機会であり、宗教冒涇・ムスリム侮辱という旗印を掲げることで大量の民衆動員の実現が容易になる。

だからアホッに対する身構え方は上の両者間で類似のものになってくるわけだ。両者間の合議による共同作戦の結果であろうがなかろうが、現実の社会現象から両者が似通ったメリットを得るのは疑いのないところだろう。

ところがこの宗教冒涇事件という社会現象について、SARAによる国民勢力間の分裂と敵対を煽るものだという本質的な理解を置き去りにしてはならないのである。宗教冒涇という悪事を犯したアホッを保護する云々の低次元の話でなく、国政トップにとっては、国民の間に分裂と敵対を生み出す黒雲をさっさと中天高く追放してしまいたいというのがホンネだろう。

(3)国民の間で騒擾が起こることが国家の治安と防衛の力をそぎ落としてしまうのは、既に世界中の常識となっている。治安と防衛の力がそぎ落とされると、合法的民主政権を崩壊させ、あるいは民主的で穏健な国家体制を転覆させようと画策する諸勢力にチャンスを与えることになる。

そして案の定、イスラム界が勢力誇示を目指し、不良政治エリートがアホッを犯罪者に仕立てようとして16年11月4日に組織した大規模デモに、都内を大混乱に陥れようと画策する者たちが乗ったのは、次の記事から読み取れる。

「98年5月暴動の再現に失敗(前)」(2016年11月11日)

「98年5月暴動の再現に失敗(後)」(2016年11月14日)

それと同じ一派だったのかどうかは不明だが、12月2日に再び行われた大規模デモにも、ジョコ・ウィドド政府を転覆させようとしていた者たちが乗っていたのは次の記事から明らかだ。

「政府転覆計画が明るみに」(2016年12月5日)

かれらがアホッの宗教冒涇を弾劾する社会現象を促進させるべく前出の2勢力と通じあっていたのかどうかは不明だが、この勢力はデモという社会的混乱を利用することが目的だったと言えるにちがいない。

インドネシアのデモは金で仕立て上げられるものであり、また容易に暴動化させることのできるものであることは、共和国成立以来の常識と化している。イスラム界がデモを計画すれば、それに横乗りする勢力にとってはそのデモをどのように利用するかということだけが残された問題になる。かれらが精通している暴動化の仕込みをそのデモの中に混入させればそれで十分だったのではあるまいか。[続く]

「悲運の印尼華人(終)」(2016年12月22日)

(4) 更にインドネシア国民が四分五裂して暴力対決に向かうことを狙っている勢力がある。インドネシア共和国を、もしくはその領土の一部をイスラム教原理主義で統治される国に変え、その統治支配者として君臨しようとしているダエシュ/ISISがらみの集団がそれだ。

16年11月4日のアホッ糾弾大規模デモのあと起こった局地的な暴動に関連してテロリストグループが検挙されていることや、更には;

「ジャカルタで女性自爆テロ計画」(2016年12月12日)

で報道されている事件のあと、警察はヌル・ソリヒンがリーダーとなっているジャマアアンサルヒラファダウラヌサントラを名乗るテログループを壊滅させるべく捜査を続けて、中部ジャワや西ジャワで関係者を洗い出して取り調べた。

最初に逮捕された死の花嫁を含む4人に続いてもう7人が警察の網にかかり、その11人のうちの7人がテロ行為の容疑で拘留されている。

ところが、警察デンスス88の赫赫たる業績と言えるその事件をでっち上げだとする論がインターネット上に流れ始めたのである。現在全ムスリムが直面している宗教冒涇問題から目をそらせるために警察が仕組んだでっち上げ事件がその女性自爆テロ未遂事件だという論調だ。

そのオンラインニュース情報によれば、国会第10委員会メンバーのエコ・ヘンドロ・プルノモ議員がその表明を

出したとのことで、警察ひいては現政権がアホッ都知事の悪事をかばい、かれを援助しようとあの手この手を使っているという印象を国民に与えるような内容になっている。

国家警察は現実に行われている反テロ活動や、警察が発表した事件はすべて事実にもとづくものであり、国民がそのような論調を世の中に流すのは警察活動への妨害になるのでやめるようにという警告を公けにし、また報道されたエコ議員に事情説明をするため招請したところ、国会議員の細かい言動を取り上げて干渉するのは国会議員という地位を軽視しており、危険な兆候であるという猛反発が今度は国会の中から出て来た。

しかし警察は、その種の牽制によって反テロ現場捜査員の士気が低下することが懸念され、現場での活動に倦怠感が生じると国家国民にとってきわめて危険な事態へと発展していく、とそれに反論した。

結局エコ議員はそのような表明をだれに対しても行ったことがなく、オンラインニュース報道はメディアが議員の名前を無断使用してでっち上げた情報であることが明らかになり、警察はその報道を出したオンラインメディア7社に対する取調べを開始している。

その虚偽オンライン情報がだれにメリットを与えることになるのかは明白であり、(4)の勢力もこの宗教冒涇事件が引き起こした社会現象に乗っているのは疑いないところではあるまいか。

国民諸階層の対立や分裂を避けたい政府ではあるものの、既に起こってしまっているその事態を平穏に収めるためには、国民マジョリティに満足な結末にする以外に方法はあるまい。国民マジョリティがいくつかの勢力に鼻先を握られて特定の方向に顔を向けさせられている状況の中で、国民自身が自覚して自分の向くべき方向に顔を向けることができるかどうか、アホッの運命はその一点にかかっているようにわたしには思えるのである。

[完]